

第100号

2017.1.31

社会福祉法人 いわき福音協会

福島整肢療護園

〒970-8001

福島県いわき市平上平窪字

古館1番地の2

TEL.0246-25-8131

FAX.0246-22-1259

<http://www.ryogoen.jp/>

E-mail:info@ryogoen.jp

100
号
記念

100th anniversary

Thanks to everyone Vol.100

『光の丘』は昭和55年(1980年)12月の創刊号から36年のこの度100号(記念号)を発行する運びとなりました。これまでのご愛読に心より感謝申し上げます。

今年で65周年を迎える福島整肢療護園、そして100号に至った『光の丘』ともども、これからもどうぞよろしくお願い致します。



目次

光の丘100号の歩み part.1 — 2~3

光の丘100号の歩み part.2 — 4~5

療護園の今昔物語 — 6~7

療護園設立から現在へと続く光の道 — 8~9

園長あいさつ ほか — 10

HAPPY通信 — 11

りょうご園カフェへようこそ! ほか — 12

ひかりの丘

100号の歩み

～Part.1～



Vol.1 創刊号
昭和55年12月25日発行



Vol.2
昭和56年3月25日発行



Vol.3
昭和56年6月25日発行



Vol.4
昭和56年9月25日発行



Vol.5
昭和56年12月25日発行



Vol.6
昭和57年3月25日発行



Vol.7
昭和57年6月25日発行



Vol.8 創立30周年特集号
昭和57年10月12日発行



Vol.9
昭和57年12月25日発行



Vol.10
昭和58年3月25日発行



Vol.11
昭和58年6月25日発行



Vol.12
昭和58年9月25日発行



Vol.13
昭和58年12月25日発行



Vol.14
昭和59年3月25日発行



Vol.15
昭和59年6月25日発行



Vol.16
昭和59年9月25日発行



Vol.17
昭和59年12月25日発行



Vol.18
昭和60年3月25日発行



Vol.19
昭和60年6月25日発行



Vol.20
昭和60年9月25日発行



Vol.21
昭和60年12月25日発行



Vol.22
昭和61年3月25日発行



Vol.23
昭和61年6月25日発行



Vol.24
昭和61年9月25日発行



Vol.25
昭和61年12月25日発行



Vol.26
昭和62年3月25日発行



Vol.27
昭和62年6月25日発行



Vol.28
昭和62年9月25日発行



Vol.29
昭和62年12月25日発行



Vol.30
昭和63年3月25日発行



Vol.31
昭和63年6月25日発行



Vol.32
昭和63年9月25日発行



Vol.33
昭和63年12月25日発行



Vol.34
平成元年3月25日発行



Vol.35
平成元年6月25日発行



Vol.36
平成元年9月25日発行



Vol.37
平成元年12月25日発行



Vol.38
平成2年7月25日発行



Vol.39
平成3年3月25日発行



Vol.40
平成4年3月25日発行



Vol.41
平成4年7月31日発行



Vol.42
平成4年12月25日発行



Vol.43
平成5年4月25日発行



Vol.44
平成5年8月25日発行



Vol.45
平成6年1月25日発行



Vol.46
平成6年4月25日発行



Vol.47
平成6年8月31日発行





Vol.48
平成7年1月25日発行



Vol.49
平成7年4月25日発行



Vol.50
平成7年8月31日発行



Vol.51
平成8年1月25日発行



Vol.52
平成8年4月30日発行



Vol.53
平成8年8月31日発行



Vol.54
平成9年1月31日発行



Vol.55
平成9年4月30日発行



Vol.56
平成9年10月31日発行



Vol.57
平成10年1月31日発行



Vol.58
平成10年8月25日発行



Vol.59
平成10年12月25日発行



Vol.60
平成11年3月31日発行



Vol.61
平成11年8月7日発行



Vol.62
平成12年1月31日発行



Vol.63
平成12年7月31日発行



Vol.64
平成12年11月30日発行



Vol.65
平成13年2月28日発行



Vol.66
平成13年6月30日発行



Vol.67
平成13年12月20日発行



Vol.68
平成14年1月31日発行



Vol.69
平成14年6月25日発行



Vol.70
平成14年10月25日発行



Vol.71
平成15年2月28日発行



Vol.72
平成15年6月30日発行



Vol.73
平成15年10月31日発行



Vol.74
平成16年3月1日発行



Vol.75
平成16年7月10日発行



Vol.76
平成16年10月27日発行



Vol.77
平成17年3月1日発行



Vol.78
平成17年7月25日発行



Vol.79
平成17年11月10日発行



Vol.80
平成18年2月28日発行



Vol.81
平成18年7月31日発行



Vol.82
平成18年11月30日発行



Vol.83
平成19年2月28日発行



Vol.84
平成20年3月31日発行



Vol.85
平成21年3月16日発行



Vol.86
平成21年9月10日発行



Vol.87
平成22年2月12日発行



Vol.88
平成22年9月10日発行



Vol.89
平成23年2月15日発行



Vol.90
平成23年7月11日発行



Vol.91
平成23年11月30日発行



Vol.92
平成24年6月30日発行



Vol.93
平成25年2月28日発行



Vol.94
平成25年8月30日発行



Vol.95
平成26年3月20日発行



Vol.96
平成26年7月31日発行



Vol.97
平成27年2月20日発行



Vol.98
平成27年8月1日発行



Vol.99
平成28年3月1日発行



Vol.100
平成29年1月31日発行



ひかりの丘

100号の歩み

~Part.2~

記念すべき第1号は、昭和55年のクリスマスに創刊されました！
当時の園児でしょうか、仲睦まじく寄り添う2人の写真と治郎先生の園長就任あいさつから、ひかりの丘の歴史はスタートします。



創刊号 (S55.12.25)

誌面の変化

71号 (H15.2.28) ~ 誌面サイズがB5からA4へ！写真も文字も大きくなりさらに見やすくなりました。

昭和55年に創刊された光の丘は、36年間療護園と共に歩み続け、今号で100号を迎えました。そんな記念すべき100号では、昔を知る方には思い出を辿っていただきながら、知らない方には歴史をご紹介します感覚で今までのひかりの丘の記事を振り返ってみたいと思います。

誌面の変化

園の行事や園児の書く絵や文章が掲載され、療護園内の生活により身近で楽しい内容になりました。時には職員の結婚式の様子まで…

療護園開園30周年に伴い、当時の職員はもちろん退園者や平養護学校の先生等さまざまな方が療護園に対する思いを綴りました。



8号 (S57.10.12)

療護園開園30周年特集号

高等部の園児と退園者の2名がH12年10月17日~27日の11日間、福島県の青少年海外派遣事業「ふれあいウイング」の団員としてアメリカを訪問した際の記事が64号~65号に渡り掲載されています。現地で感じた驚きや感動と、それを日本に持ち帰りどう活かすかという前向きな意見が本人たちの言葉で綴られている素敵な記事です。



右/64号 (H12.11.30) アメリカ道中記ファイル1
左/65号 (H13.2.28) アメリカ道中記ファイル2

72号 (H15.6.30) 希望館完成



H15年3月、旧訓練棟の改築が完成し、新訓練棟「希望館」が生まれました！
新しくなったPT室・OT室・ST室に加え、ギプス室・プレイルーム・レポルーム等の部屋もでき、リハビリはもちろんの事、園児たちの活動の幅がそれまで以上に広がり、療護園の新たな可能性が生まれました。

屋外訓練場完成



75号 (H16.7.10)
屋外訓練場完成

H16年3月、電動車いすや歩行練習の場として、屋外訓練場が作られました。実際に町などにあるような段差や傾きなどを体験出来る様、坂道やカーブ、凸凹な路面、階段などを設置しました。訓練だけでなく、季節を感じながら癒やされる空間としても親しまれています。

誌面の変化

74号 (H16.3.1) から一部カラー、76号 (H16.10.27) からフルカラーに。
園での様子がより鮮やかに、わかりやすくお伝えできるようになりました。

37号(H1.12.25)ミッキー&ミニー来園

てんなビッグスターたちも来園！サインをもらったり握手をしたりと、記事から当時の園児たちの興奮が伝わってきます。



28号(S62.9.25)長嶋茂雄来園

当時の2病棟園児たちが、社会訓練の一環としてスパリゾートハワイアンズに出かけました。園児、職員、家族の総勢130名でのビッグイベントになったようです！



49号(H7.4.25)光の丘の博物誌



治郎先生が「ドクトル・じろ」名義で療護園周辺の四季折々の様子を綴る連載が始まりました。治郎先生の連載コーナーは名前やテーマを変えながら2号(S62年)～83号(H19年)までの26年間続きました。

46号(H6.4.25)

2病棟社会訓練 ハワイアンズ

ひかりの丘の歴史は、言わば療護園の歴史！記事の大小に関わらず、歴代の編集担当(広報委員)が毎回心を込めて発行してきた100号の積み重ねの中から、次ページではさらに詳しく振り返ってみたいと思います。(6～7面へ)



100号(H29.1.31)記念号

誌面の変化

85号(H21.3.16)～誌名が「光の丘」から「ひかりの丘」に変更されました。連載コーナーも現在のひかりの丘に近いものになり、療護園の毎日を様々な角度から明るく楽しく掲載しています。94号～療護園キャラクター「りょうごエンジェル」も登場します！

H23年4月より渡邊信雄先生が園長に就任されました。この年は東日本大震災が発生した年でもあり、震災後の療護園の様子や、震災に関する全国からの支援への御礼等を掲載しました。

81号(H18.7.31)

吉原先生診療部長(現副園長)就任



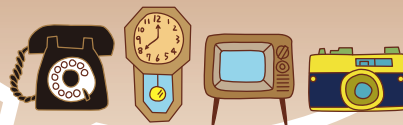
90号(H23.7.11)渡邊先生園長就任、東日本大震災後



療護園の**今****昔**物語

The story of the present and the past in Ryogoen

ひかりの丘を通じて療護園の過去と今を比べてみました



幼稚園さん お料理会



幼稚園の入園児さんはスタッフといっしょにホットケーキを作りました。小麦粉を泡立て器でかき混ぜ、ケーキを焼く作業を入園者さんは1人ずつ順番にお手伝いしました。ケーキの形は丸だけでなく、型抜きを使ってクマやうさぎ、犬なども作りました。

1983(S58)12.25発行 13号より

保育活動 学校長期休み ミュウクラブ

今も未就学児・学童・成人の方々とお菓子作りなどの作って食べる企画を楽しんでいます。昔と違うところは、例えば粉を混ぜる時、一生懸命手で混ぜていましたが今は、電動の機械、片手でできてしまうところですね。

でも、昔も今も作る楽しさ、食べる喜びは一緒ですね。



クリスマス 祝会



夕闇せまる頃、園児と職員が共に、キャンドルを灯しながら園長先生の「心の貧しき人、心の清い人の幸い」というお話を聞きました。さらに先生はその夜、サンタクロースに変身し、各病棟へ回ってのプレゼント。子どもたちは、大喜びで楽しいクリスマスを迎えました。翌日はクリスマス祝会(厚生館)。この日のために練習してきた劇や遊戯をお父さん、お母さんの前で一生懸命発表しました。障害に応じ自分のできる役をこなし、障害を乗り越え、素晴らしい演技を発表しました。

1980(S55)3.25発行 2号より

クリスマス祝会は療護園の一大イベントです。子どもたちも毎年、楽しみにしてサンタさんに欲しいプレゼントを手紙に書いています。祝会自体も時代とともに内容が変化しています。しかし、その中で皆で「クリスマスを祝う」ということは昔も今も何一つ変わっていません。

これからもクリスマスを入園児者・職員・ご家族、皆で祝い、笑顔で楽しむことを継続していきたいです。



ミュウクラブ スタート



1997年(平成9年)4月、高等部を卒業された入園者さんを対象にした日中活動「ミュウクラブ」が始まりました。名前の由来は、いわき市の鳥であるカモメの愛称「ミュウ」です。ミュウクラブが「ミュウ」のように「いつも人々に愛されるように」との願いが込められています。

初回の行事は、6月に石森山のフラワーセンターに出掛け、散策を楽しみました。

1997(H9)10.31発行 56号より

ミュウクラブは現在、3病棟で平日の午前中に活動しています。内容は、歌や制作、体操、散歩、感覚遊び、読み聞かせ等。「ミュウクラブの歌」(アニ×「ドラえもん」主題歌)をみんなで歌ってから始まります。

園外活動は、入園者の皆さんにとって貴重な時間であることは言うまでもありません。昨年は、ショッピングモールでの買い物や小名浜港遊覧船、法人内のお祭り(みはま福祉祭、カナフ・野の花祭)等に出掛けました。



四半世紀の変革

平成に入った頃の、療護園の訓練棟は個室4部屋とコンクリートブロックを積み上げた体育館(厚生館)が外にあり、春は雀がチュンチュン雛を育て梅雨には雨漏りが酷くバケツが10個も並び、冬は寒くて寒くてとても服を脱いでリハビリをするような状態ではありませんでした。10mのプールもあり、ペルテス病の免荷訓練、脳性麻痺児の水治療法を行いました。外来は少なく、40名定員の病棟が3つあり入園児を主に対象としていました。湊純先生がリハ部長で「生活にどうリハビリテーションを生かすか」を検討し、個別訓練の他に遊びの要素を取り入れたグループ訓練を設け、座位バランスを保ちながらのジャンケン大会、腹這いでの競争、夏はプールで力を抜いて浮く練習等もしました。年に1度のカンファレンスを行うため、各部署から情報を集め情報の共有と目的の統一化を図ったのもこの頃です。その後、パソコンによる情報共有システムを純先生が作ってくださいました。

徐々に外来が増え、重度重複障害の治療の難しさを痛感し、平成5年ボイタ法を研修、導入しました。体幹筋の活動を引き出し

脊柱アライメントが変えられる技術で、当時「股関節をはずすな、脊柱を曲げるな」のテーマにやっと手段を持てた思いでした。また同時期に、湊正美先生を中心に試行錯誤の末、姿勢管理で屈曲腹臥位保持具いわゆるプロン台を作製、生活に導入されました。この頃からPTはボイタ法、OTは姿勢管理という役割分担ができてきました。「こどもの最大能力を引き出し、二次障害を最小限に抑える」ために家族指導付き入院、期限付きの単独入院を開始し、「適切な時期に適切なアプローチ」を積極的に外来に働きかけていきました。常に成果が求められ、親御さんの信頼を得て協力し合える療育をするため、悪戦苦闘していた日々でした。こんな時、園長だった湊治郎先生には、何気ない言葉で励まされたことでした。

悩みとしては、リハスタッフがなかなか定着せず常にマンパワー不足。患者さんに提供する質と量の確保が難しいと感じていました。スタッフ確保のため訓練棟の外観も大切ということで、新しい訓練等の建築が本格化し、設計からカーテンの材質まですべてに関わらせていただき、希望館が平成



2010(H22)2.12 87号

15年に完成しました。その頃ST、リハ工士がスタッフに加わりケースワーカーとの協力体制が整いました。平成16年には「園の食事を安心、安全、楽しく」をテーマにもぐにこのプロジェクトが発足し、現在の給食委員会に引き継がれています。平成24年からは臨床心理士も加わり心の問題についての議論ができるようになりました。

現在は、家庭だけでなく患者さんを取り巻く環境(保育園、学校、各事業所、各医療機関)に対し、リハビリテーションの視点から関わりを深め、相互連携することが求められています。広い意味で「生活にどうリハビリテーションを生かすか」が問われていると思います。また原点に帰って今後とも質の高いリハビリテーションを提供したいと考えています。

電子機器の変化



2013(H25)8.30 94号

創刊号(S55.12.25発行)でタイプ教室、12号(S58.9.25発行)でコミュニケーションプリンター講習会、23号(S61.6.25発行)では療護園でのワープロ指導が紹介されています。27号(S62.6.25発行)ではアマチュア無線講習会及び「福島整形外科療護園アマチュア無線クラブ開局」、42号(H4.12.25発行)ではコミュニケーション手段としてのパソコン(Mac)の導入。震災後の90号(H23.7.11発行)や92号(H24.6.30発行)では原発事故後の避難時に活用したSkypeについて紹介。94号(H25.8.30発行)では療護園に導入されたiPadについての掲載がありました。

30数年の経過の中で、電子機器も大きく進化し、コミュニケーションツールとしてとても身近な物となりました。

ました。

54号(H9.1.31発行)では退園者による印刷作業や指導を担うREVO活動開始報告。75号(H16.7.10発行)、88号(H22.9.10発行)、92号(H24.6.30発行)では園児パソコンクラブ「フリーダム」の紹介が掲載されました。



「アマチュア無線講習会」
1981(S56)6.25 27号



1997(H9)1.31 54号

球技大会



2000(H12)7.31 63号



1996(H8)8.31 53号

3号(S56.6.25発行)から掲載された児童福祉施設球技大会。県内各地で実施され、遠方での開催時には宿泊訓練も兼ねていました。

当初はソフトボールや卓球が主たる競技でしたが、15号(S59.6.25発行)からは園児の障害が重くなったことを受け、非公式でゲートボールの開催を提案したことをきっかけに、正式種目化された経緯も読み取ることができます。球技大会に関する記事は75号(H16.7.10発行)が最後で、今では大会そのものはありません。

大会に向けての練習、大会参加に伴う観光・宿泊、そして結果(勝敗)。全てが子どもたちを育てる経験の機会であり、様々な職員が関わることでできた楽しく素敵な思い出の数々。記事を振り返る中で昨日のこのようによみがえります。



「あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、
地上で心を一つにして祈るなら天におられるわたしの父は、
それをかなえてくださいます。
ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には
わたしもその中にいるからです。」

—聖書 マタイの福音書 18:19～20—

湊 治郎先生の思いを辿る…

「ひかりの丘」の発行は1980年当時、湊治郎先生が園長に就任された年から始まりました。療護園の子どもたち、ご家族のこと、職員のこと、時代の流れに伴い日々変化していく医療・福祉の動きと共に療護園の変遷を伝えてきた「ひかりの丘」もついに100号を迎えました。湊治郎先生は創刊号で療護園は「医療」と「教育」と「キリスト教」という三本の柱に乗るようにして立っていると述べています。三本柱のうち、どの一つが欠けても、また長すぎても短すぎてもいけません「キリスト教」という柱は他の二本と比べると一番理解しにくい柱のように見えて最も大事な柱です。いわば療護園の心というべきものです。ここでは三本の柱の一つである「キリスト教」について聖書の言葉と、園内で子どもたちが食事の前にしている毎日の祈りと歌を紹介します。



(昭和30年代と現在の療護園の食事風景)

夕食時のお祈りの言葉

「おいのりいたします。
かみさまきょう いちにち、ぶじにすごせたことを、
かんしゃいたします。
また、あすもよいひであるように おまもりください。
また、おうちでしんばいしてくださいさる、
おとうさん、おかあさん、きょうだいたちも、
おまもりください。
また、べつでねていて、あるけない おともだちも、
おまもりください。
また、このあたたかいおしょくじを
どうもありがとうございます。
このかんたんなおいのりを イエスさまのみなによって
おねがいたします。
アーメン いただきます。」

療護園の食堂では、昔も今もおいしく・楽しく食事を
する子どもたちの声が聞こえてきます。「いただきます」の前
に離れて過ごす家族のため、友達のため、食事を作っ
てくれた人たちの感謝も込めて、子どもたちがどんな風に
食事の前にお祈りしているか湊治郎先生がこの祈りを
作られたきっかけとなるエピソードを交えて紹介します。



この小さな祈りは聴かれています。。。

祈りが作られたきっかけ

追悼記念誌 湊治郎先生を偲んでより

(一部省略) 担当の保育士さんが、長いこと食事の前にこども讃
美歌を歌い、短いお祈りをささげてきました。ところが、その保育士さんの
都合で、急にお祈りが出来なくなり「先生、お願いします」というわけで、
私にまわってきました。重い知的障害もあることだし、形だけのお祈りの
つもりで、きめられた言葉のお祈りを唱えて、「おうちで心配してくださいさる、
お父さんお母さん兄弟たちもお守りください」と言った途端に、びっくりし
たことに「そのとおり」と言わんばかりに、みんなが一斉に、ゴツと動き始め
たのです。最初は、偶然かと思いましたが、2度目も
3度目も同じなので、これは解かっているのだなと
納得しました。ヘンリーナウエンさんの著書に、重い
知的障がいのある方にかえて豊かな霊的賜物が
与えられていると書いてありますが、襟を正す思い
でした。

保育士のオルガンに合わせて「食事の歌」を歌います♪



食事の歌

あかるいあさに なったとき わたくしたちは祈りましょう
静かにお手々を組み合わせ「今日もよい子であるように
おまもりください かみさま」と

楽しいお昼になったとき わたくしたちは祈りましょう
静かにかしらをうなだれて「まずしい人にきょうのかて
おあたえください かみさま」と

暗いよるになったとき わたくしたちは祈りましょう
静かにふたつの目をとじて「ぶじにすごした一日の
おれいをもうします かみさま」と

大河内 一郎先生の思いを辿る…

今回は療護園の事務長として、光の丘創刊号からすでに文責を担われていた、当法人の海野洋理事長より大河内一郎先生との関わりで印象に残っていることを掲載します。

「ひかりの丘」100号の記念発行おめでとうございます。

この小さな新聞が、長い年月、休刊する事なく続けられたことに、先ず敬意を表したいと思います。関係職員には大変な苦労もあったと思いますし、特に、仕事の合間の発行準備は容易ではなかったと察しています。

今、改めて、まとめられた小冊子をめくりながら、30数年前の懐かしい記事に思わず目を凝らしました。その時代の移り変わり、或いは、行事等を伝えた記事には、子供達への優しさや思いやりが行間に滲んでおりました。

当時は依然として、見えない偏見や差別感が社会の底流にはありました。ならば子供達の屈託のない明るさを、心配する家族や社会に伝えよう、そんな動機によって発行されたと記憶しています。

以来、施設の暮らしや子供達のニュース、或いは、時代ごとの今日的な福祉課題を、この小さな紙面に埋められ、関係者や地域の皆さんに届けられる様になりました。

今、懐かしく振り返れば、この「ひかりの丘」に関わった、それぞれの先生方を思い出さずにはおれません。

創立者・大河内一郎先生は、この創刊号の以前にも、その折々に執筆されておりました。なかでも退園する子供達との別れ、療育について葛藤し、涙する職員に「愛情とは苦しむこと」と思いやった先生、この職員へのいたわりが忘れることは出来ません。

その先生が、療護園の間近にある一握りの丘で園児達と戯れている姿が浮かびます。誰ともなく呼んだ光の丘の名称、もしかしたら、日頃から、光り輝く子供達と公言し、その小さな丘に触れ合う先生の姿を重ねられ、いつしか、ここを光の丘と呼ぶ様になったのかもしれない。この新聞の呼称にしても、これとは無関係ではなかった筈です。

また創立者と共にご苦勞された鎌倉章先生は、この法人の基本をなす「聖書的な信仰」を、しっかりと護られた先生でした。毎日曜日には子供達を集め、日曜学校での聖書の話は欠かす事はなく、時折、この「ひかりの丘」の紙面に聖書の言葉を寄せられました。その意味でも、法人の理念をしっかりと継承された先生でもありました。

そして前理事長として、医師でもあった湊治郎先生、先生の子供達へ注いだ愛情は、とてつもなく大きく、ご家族の皆さんからの信頼は絶大なものでありました。また福祉に対する思い、キリスト者としての「愛」その心をもいつも記事に寄せてくださいました。私に取っても、本当の福祉とは何かを学んだ忘れ得ない先生でもありました。

今の時代、情報発信は大切ですし避けられません。社会の福祉観や療育内容の変化も、年月と共に変わります。そうした情報を、これからも変わらず提供して欲しいと願っています。

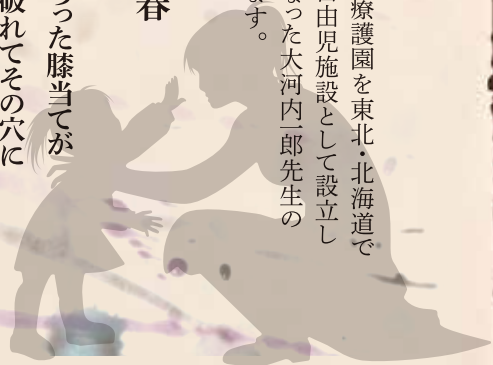
いわき福音協会理事長 海野 洋

1952年、療護園を東北・北海道で初の肢体不自由児施設として設立し初代園長となった大河内一郎先生の詩を紹介します。

春

つくろった膝当てが
もう破れてその穴に
すりむけた創が見える
のろのろと這っていく子の
あとをそとついでいくと
かじかんだ手を突っ張り
満身の力をふりしぼって
女の子が這って行く
片足を前にすすめると
一方のあしは震えている
歩みを止めた女の子は
ジッと前をみつめていた
「先生あれ！先生」
子は顎で前を指した
コンクリート道の向こうの
枯れた芝生の中に咲いた
紫色の小さな花「輪」
「もう春だよ よかったね」
麻痺の子はニッコリ笑った

詩集「雑木林」より



福島整肢療護園（以下療護園）は、今年で創立65年を迎えます。広報誌「ひかりの丘」も今年で100号となり読者の皆様と制作に当たられてきた広報委員会諸氏に深く感謝申し上げます。

平成23年4月に園長を拝命し6年が過ぎようとしています。40年以上「筋であった急性期医療の磐城共立病院小児科勤務から、リハビリ主体の慢性療養型医療への転身は大変な面は多々ありましたが、全国あるいは東日本の肢体不自由児施設協議会、重心施設協議会の諸先輩方のご指導・ご支援、磐城共立病院をはじめとした地元医療機関、関係諸機関のご支援・ご協力、そして何よりも法人・療護園職員の真摯な努力のおかげで療護園の灯を消すことなく今日に至ることができました。

さて、東北・北海道で最初の肢体不自由児施設として創立された当園ですが、その後の社会情勢、疾病構造、医療構造、医療福祉制度の変革などにより、運営継続は越えなければならぬ大きな困難に直面しています。療護園と、何よりも利用者の将来のために課題を整理してお示しし、更なるご支援を賜りたいと考えます。

①少子化、疾病構造の変化、医学医療の進歩、社会・福祉制度の拡充により、施設に有目的の期限で入院する肢体不自由児が激減し、重症心身障害児がより重症化、高齢化し、施設を占有する状況に至っています。一方では重症児者の地域化、在宅化も進行しています。

施設には、対象の変化に合わせたハード、ソフトの改革と地域で暮らす障害児者への適切な対応が求められています。

②施設の老朽化が進んでいます。安全安心なサービスの提供のためにも、新しい施設の建設を進めなければなりません。本年より病棟をつに統合し、職員配置、サービスの在り方などを検討しながら、新施設建設の布石にしたいと考えています。利用者そして地域の皆様にもご意見、ご要望を積極的に寄せいただくようお願い申し上げます。

③医師をはじめとした専門職の確保の困難性。東日本大震災以前からの問題が原発事故も相俟って医師、ことに勤務医の深刻な不足が続いています。このような状況下、常勤の専門医の確保は将来に託し、専門施設からの専門医の定期的な派遣を確保し、専門医療の質の低下を最小限にし、専門医療の提供を継続していきたいと考えます。

④経営の健全化。①と関連して入院患者が減少し続け、赤字経営が続いています。安全安心な、そしてより良いサービスの提供に努め、地域での知名度を上げ、患者数増加の努力を進めます。



「いわき福音協会がんばれ」

社会福祉法人 佐賀整肢学園 副理事長 原 寛道

社会福祉法人いわき福音協会の役員のみなさん、ならびに利用者やそのご家族のみなさんこんにちは。私は社会福祉法人佐賀整肢学園の原寛道と申します。実は平成二十七年四月から福島整肢療護園へ非常勤医師として応援してきました。平成二十八年十二月からは新しい事業がスタンバイとなって忙しくなり、いったん応援終了となりました。これを区切り私から見たいわき福音協会の感想などを書いて欲しいとの事でしたので何かの参考になればと思い執筆する事にしました。

私の歴史と今回の応援することになった経緯から話を始めてみましょう。私は昭和五十六年に九州大学整形外科教室から佐賀整肢学園へ飛び切りの若さで施設長として赴任しました。以来法人経営の最前線を担当してきました。当時、佐賀整肢学園は明日をも知れぬ極め付きの財政難と労使紛争のまっただなかに行きました。良くそんな所に行くものだと思われるでしょうが、教授からの天の声であったし、生来好奇心が強く、怖いもの知らずだったこと、何やら幼少期から人生を達観していたこと、それに幼少期から障害児者への差別感が全く無かったこと、等

がこの進路決定に影響したのでしよう。しかし落下傘一つでの赴任では孤立は必然であり、その後の数年間は戦いの連続でした。しかし率先垂範して診療や経営に当たっている内に財政は上向きとなり、私の言うことを聞いてくれる職員も増えてきました。もちろん頭と体はフル回転させました。そして一段落したところで、思うところがあった事業の拡大の方向へ舵を切りました。そして肢体不自由児施設一施設から始まって今や六事業所へ成長し職員数も約850名ほどとなりました。規模としてもその活動内容としても誇れる法人へ成長したと自画自賛しております。福島整肢療護園の湊純先生とは肢体不自由児施設時代からのつきあいでしたので昔々から知っていました。「東北には真面目な先生がいるもんだ」というのが率直な印象でした。

さて佐賀でそれなりに忙しくしていたのですが、佐賀こども発達医療センター事務長の森さんから、「福島の松本事務部長がへばっています、話を聞いてもらえませんか」と相談がありました。「医師不足でまもなく減点を受ける、減点を受けたら潰れる。頼れる先は全国でも佐賀整肢学園しかない」とこんな事でした。「い

いよ」とOKしました。小児科の市丸先生と整形外科の高杉先生と私とでローテーションを組みました。「ほんとに行くんですか？」とみんなが驚いていました。私が一年以上も福島整肢療護園へ行っていることを聞き知った長老は「原君、自然体のままにして早く潰したほうが早く改革が起くるのではないか、単なる延命になっていないか」との意見でした。私もその通りだと思ったのですが、財政破綻の大変さとその後遺症については経験済みなので、「いやいや」と思い直して今日まで応援してきた訳です。あれあれイントロだけで約束の1000文字になってしまいました。

遺言を一つ。「社会福祉法人経営はその原理は会社経営と同じです。職員がただ真面目に働くだけでは生き残れません。新しいサービス商品の開発、業務の効率化、そして人材の育成です。これだけの事を実践するにはリーダーの強い意志が必要です。常に発想を新しくして改革しなければなりません。経営は諦めてはなりません。その先には必ず成功があります。」強い民間法人になつて欲しい。これが私の福島整肢療護園への願いです。なお「私の経営理念」は松本事務部長が隠し持っているので興味のある幹部の方には見に行ってください。がんばれ。

Happy通信

“幸せなら手をたたこう”

1病棟タレントショーへようこそ

病棟内のそれぞれのお部屋を訪れると音楽や絵の才能あるアーティストたちや、研ぎ澄まされた感覚を持つ一人ひとりが出迎えてくれます。今回は1病棟の子どもたちと成人の方による特技を大公開します。



伊東和子さん
パソコンを使いこなす
IT WOMAN!

和子さんは週末もよくパソコンに向かいお仕事をしています。その表情は真剣そのもの!自分の言葉で文章を作成しメールまたは手紙にすることで家族や職員にも思いを伝えています。気持ちを文字にして伝えることも和子さんにとって大切なコミュニケーションの一つです。パソコン操作の途中、コーヒーを飲んでティーブレイク♪

座位保持装置のテーブルに毎月STが用意してくれているカレンダーを指差して今日が何曜日か教えてくれます。峰樹さん自身が、毎日のスケジュールの流れと何時に担当のセラピストが来るのか完璧に把握しています。もし今日が何曜日か忘れてしまったら峰樹さんに聞いてくださいね!



牧田優里さん
アップテンポな曲も
リズム感抜群!

童謡やクラシックを聴いて歌うことが大好きです。それだけに留まらず、テクノポップと呼ばれるテンポの速いPerfume(パフューム)の「チョコレートディスコ」も可愛く、ノリノリで歌います♪実習で学生さんが来てくれた時は誰よりも真っ先に拍手で歓迎してくれます。

松村峰樹さん
抜群の曜日感覚!



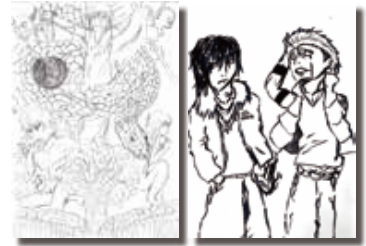
伊東洋人くん
十八番は民謡 会津磐梯山!

エンヤ〜会津磐梯山は宝の山よ〜と、登校前にこぶしの効いた歌が聴こえてきます。季節感のある曲が好きで春は「ひな祭り」、夏は「七夕さま」と1年が巡ります。震災時、山梨県の病院へ避難した時にはご当地民謡「武田節」をマスターし帰ってきました。あなたの誕生日に、洋人くんにリクエストするとハッピーバースデーを歌ってくれるかも!?



茨木優太くん
惹きつけられる感性の鋭さが持ち味!

今回の掲載のため少年の絵と、療護園キャラクター「りょうごエンジェル」をお題に優太くんの創造力で聖書のお話の一部を描いて頂きました!苦手の蛇のウロコを、一つひとつ描くのが大変だったようです。絵だけでなく学校で出品した詩・標語は優秀賞総なめの感性の豊かさが光るクリエイター。



“晴レル家満喫”



秋といえば真っ先に頭に浮かぶことは「食欲の秋」ではないでしょうか。秋の季節が深まる10月のある日、3病棟の5名の入園者さんは、カフェレストラン「晴レル家」へスイーツを食べに出掛けました。「晴レル家」とは、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、当法人いわき福音協会が運営している、カフェと野菜の直売所を併設したお店です。場所は園から歩いて約1分。法人内の敷地にあります。

当日は、快晴。気持ちのいい秋の陽

射しを浴びながら、「晴レル家」へ向かいました。事前にデザートは電話で予約していたので、到着するとメニューからドリンクを選びました。カルピス、ミルク等を注文。ドリンクは中身がこぼれないように蓋が閉めてあって、安心して飲むことが出来ました。普段、ストローで飲む機会が少ない入園者さんも上手にストローで飲んでいました。

テーブルに届いたデザートは、「かぼちゃのムース(生クリーム添え)」、「梨のシャーベット(キウイソース添え)」、「ヨーグルトゼリー(黄桃ソース添え)」の3種盛りプレート。色とりどりのスイーツは、スプーンを付けるのが勿体ないくらい綺麗でした。食形態がやわらか食や押しつぶし食の方も安心して食べられるように調理していただきま

した。みなさん存分に味わい楽しむことが出来ました。

カフェでの軽食を終えて、帰りに野菜の直売所に寄りました。ここは、野菜ばかりでなく可愛い生活小物や雑貨も販売されています。みなさん、ベッド脇や座位保持装置に飾る小物を選びました。みなさん、ハッピーな気持ちになれた一時だったのではないのでしょうか。



Thanks for everything

ボランティアの皆様
いつもありがとうございます。

縫製ボランティア 櫻井くみさん

※左から4人目 取材日/2016年3月16日



長きにわたり療護園に縫製ボランティアとしてお越しいただいていた櫻井くみさんが、ご主人の定年退職に伴い2016年3月でボランティアを終了されました。療護園敷地内にある医師住宅（坂本さん宅）で坂本さんご夫婦、ボランティアの方々と共に入園者や職員に対し優しさや深い愛情をもちながら、入園者の衣服の修繕やつなぎ服の製作、補装具のカバー製作等の活動を月1回の頻度で継続して下していました。

これまでの櫻井さんの愛ある活動に感謝しながら、今までの思い出や活動を通して入園者に思うこと等お話を伺いました。

療護園にはじめて来たのは？

2000年頃です。

療護園に来ることになったきっかけは？

磐城教会の週報に療護園のボランティアの記事が載っているのを見て、いわきに引越してきたばかりだったので仲間ができるかなと思い参加しました。

ボランティア活動を振り返って大変だったこと、思い出に残ることは？

大変だったことは、入園者それぞれの身体の特徴に合わせて製作すること。特に複雑な作りになる物は入園者や装具を病棟に直接見学に行き、坂本さんの製図を基になんとか作り上げたこともあり、その時はみんなで達成感を感じました。

破れたカバーの修繕をする時は「こんなになるまで使うのか…」と涙が出ました。生地が足りないときは、柄の違う生地をつなぎ合わせて一枚の生地にするので、端布も全て綺麗に折りたたんで保存してあります。

いつも使う人の気持ちになって製作し、大変なときも口癖の「まあ、いいか!」という言葉で前向きに取り組んできました。休憩時間に、持ち寄ったおかずや手作りケーキ等を食べながらみんなで話をするのも楽しい時間でした。

療護園の入園者に思うこと

この子たち「に」世の光を、ではなくこの子たち「が」世の光だ…と思います。その光に吸い寄せられると言うか…この子たちがいるから、私たちも生きていける。一緒だなあと思います。自分に何ができるのか、自分とは何だろう、

と考えるきっかけになったり。とにかく、素晴らしいパワーを持っていると思います。

今後は

主人の故郷である北海道に引越す予定です。できれば療護園の縫製ボランティアにまた来たいなあと思います。

主人とお米を作りたいと思っていますが2年程かかるらしく…まあ、のんびりやりたいです。



長きに渡るご活躍ありがとうございました。現在は雪に悪戦苦闘しながらも北海道で元気に過ごしていますとの事です。



平成28年12月3日に毎年恒例のいわき地区高校JRC(青少年赤十字)クリスマス会が開催されました。今回も市内より6校の参加がありました。

光の丘をさかのぼると、10号(S58.3.25発行)の記事に「10年以上前から続いている長い活動の一つ」と紹介されています。少なくとも40数年に渡り活動いただいていることに改めて感謝申し上げます。

スタッフ通信

いようご園
カフェへ
ようこそ!

このコーナーでは、当園のスタッフが好きなこと、気になることなどを自由におしゃべりします。スタッフの新たな一面がわかるかも！
第13回は、リハビリテーション科の昆野真依さん(左)と千田祥子さん(右)です。

グルメな2人♪

こんにちは！私たちはリハビリテーション科の昆野真依(このまゐ)と、千田祥子(ちだしょうこ)です。私たちの出身は岩手県奥州市水沢区です。水沢小学校、水沢中学校、岩手リハビリテーション学院と、同じ学校に通ってきました。中学校のバドミントン部の先輩、後輩ではありましたが、ちょっとした顔見知り程度。療護園に入ってから仲良くなりました。昨年私(千田)が実習生だったところに、初めて2人で岩手に帰った時にびっくり!!なんと、実家が近所だったんです。それからはほぼ毎回真依さんの運転する車で帰っています。

(千田)いつになるかわからないけれど、私の運転がうまくなったから、真依さんを乗せて帰ろうと思います。

(昆野)ぜひ!よろしくね。

私たちの紹介はこのくらいにして…ここからは私たちの地元、奥州のPRをしていきたいと思います。まずはラーメン。ラーメン好きの千田がオススメするのは、菊亭の“ニラ南蛮ラーメン”。辛さが選べ、おじちゃんの作るニラ南蛮とキャラの濃いおばちゃん待ち構えています。同じ奥州出身のOTの橋本東一さん曰く、「あれはラーメンを超えている」!?

是非奥州まで行って食べて欲しい一品と話していました。ちなみに昆野がオススメするのは菊亭の隣にある石川五右衛門の“梅肉ラーメン”です。次はお菓子。奥州と言ったらテリー伊藤さんもTVで紹介してくれていたフルールきくやの“奥州ポテト”。しかし、私たちは後藤屋の“麦つき餅”が大好きです。麦が練りこんであるわらび餅に、黒みつをかけて食べる。いってシンプルなものですがとてもおいしいです。

食べ物ばかりの紹介になりましたが、奥州にはまだまだたくさん良い所があります。ぜひ皆さん立ち寄りみてください!

これからも元気に楽しく仲良く精進していきたいと思っています。
P.S 私たちグルメなでいおきの美味いお店をぜひ教えてください!



菊亭の“ニラ南蛮ラーメン”



石川五右衛門の“梅肉ラーメン”

編集後記

この度『ひかりの丘』100号を発行できることをとても嬉しく感じています。わたくしごとになりますが、入職一年目より研修広報委員(現広報委員)として光の丘に携わるようになったのが63号(平成12年7月31日発行)の時。数えてみると今回で38号目、丸17年という年月になっていました。

100号の発行準備のためバックナンバーのページをめくっていると、それは自分が療護園で過ごした時間をたどることであり、一つ一つの記事、写真が様々な記憶を新鮮かつ懐かしくよみがえらせてくれました。もちろん、ずっ

と昔の療護園のことも知ることができたのは言うまでもありません。

やはり100号の発行準備のため倉庫を整理する中で、昭和34年に発行された光の丘8号が見つかりました。実は光の丘は一度その役割を終えていたようです。治郎先生が就任されたのをきっかけに再開されたのでした。

継続は力なりでリスタートされてから36年。これからも療護園の歩み(記録)を『光の丘』が記し続けることを切に願います。(実)